The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代中国語における“是”構文の意味と機能
Author(s)	中田, 聡美
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/90044
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　中田　聡美　　）	
論文題名	現代中国語における“是”構文の意味と機能

論文内容の要旨

本研究は、現代中国語における“是”を構文の枠組みで捉え、その意味と機能を明らかにすることを目的としている。中国語文法体系における“是”の位置付けに関しては、未だ統一的な見解が得られていない現状にある。そこで本研究では“是＋NP”における“是”を動詞、“是＋VP”における“是”を能願動詞(助動詞)と見なし、各構文についてモダリティの観点から考察を行った。本論文は全８章から構成される。

第１章では、本研究の目的を明らかにした上で、論文全体の構成を示した。また、本研究で使用する例文の出典についても明記した。

第２章では、代表的な先行研究について概観した。第１節では、“是”が同動詞、コピュラ、動詞、副詞として捉えられてきた事実を時間軸に沿って紹介し、“是＋NP”における“是”を動詞、“是＋VP”における“是”を能願動詞と見なす本研究の立場を示した。第２節では、国語学及び日本語学における陳述論、英語学におけるmodalityとmood、中国語学における“语气”と“情态”について概観した上で、本研究で使用する用語の定義を行った。

第３章では、場所詞を主語にとる“LOC＋是＋NP”構文を研究対象とし、存在文“LOC＋有＋NP”構文との比較を通じて考察を行った。“LOC＋有＋NP”は客観的に存在を叙述するのに対して、“LOC＋是＋NP”は存在するモノ/ヒトのみに視点を向け、主観的に存在を叙述するという違いが存在し、それは話し手の異なった「捉え方」を反映していることを指摘した。さらに、構文と数量詞の共起、構文と形容詞、副詞の共起、LOC＋是＋NP”の拡張構文としての“VP＋是＋NP”構文について考察し、“LOC＋有＋NP”とは異なる“LOC＋是＋NP”の特性を明らかにした。

第４章では、“是＋VP”構文について考察を行った。“是＋VP”は各文脈において、是認、訂正、原因説明、目的説明、確認のモーダルな意味を表すことを示し、それは「断定」義からの拡張によって生じると論じた。目的語節としての“是＋VP”における“是”は、明確な意味を持たないものの、話し手明示マーカーとして機能するものと見なした。その上で、“是＋VP”における“是”が「現実モダリティ」に属する能願動詞であることを指摘し、中国語のモダリティ体系において、「非現実モダリティ」の能願動詞“要”、“会”と対立関係にあることを明らかにした。

第５章では、“是不是”構文を文中型“是不是＋VP”構文と文末型“VP＋是不是”構文に大別し、考察を行った。文中型の構文的意味は聞き手に〈確認〉を要求することであり、“是不是”は命題をスコープにおさめる「対事的モダリティ」に属する。それに対して、文末型の構文的意味は聞き手に〈承認〉を要求することであり、“是不是”は話し手の判断をスコープにおさめる「対人的モダリティ」に属する。よって、文中型における“是不是”と文末型における“是不是”は、異なるモダリティ階層に属するものであることを明確にした。

第６章では、命題を包む“不是……吗”構文について考察を行った。“不是……吗”の構文的意味を〈認識要求〉と見なし、この構文は命題が聞き手にとって既知情報の場合のみならず、未知情報の場合であっても使用できることを指摘した。構文の機能としては、想起、疑念、反駁、弁解、驚き・意外性があることを示し、これらの機能が生じるメカニズムについても分析を行った。さらに、“不是……吗”をモーダル・フレームの一つと見なし、構文と副詞、文末モーダル助詞の共起関係を調査することで“不是……吗”のモダリティ階層を明らかにした。

第７章では、“二音節副詞＋是”における“是”について考察を行った。従来の研究では、モーダル副詞は“是”と共起しやすいこと、二音節副詞に後続する“是”は意味に影響を与えない成分であることが指摘されてきたが、本章では“二音節副詞＋是”における“是”の意味機能として、原因説明、断定、状況・状態、文修飾副詞形成、焦点マーカーがあることを示し、“是”は完全には本来の意味機能を失っていないことを明らかにした。また、モーダルな二音節副詞であっても“是”と共起しないことがあり、それは未然事態や否定の場合であると指摘した。

第８章では、以上の考察をまとめた上で、今後の課題について論じた。“是”は中国語モダリティ体系を形成する副詞、能願動詞、文末モーダル助詞の構成要素となり得ることから、モダリティ体系における重要な要素の一つであると言える。本研究は“是”構文の体系的研究を通じて“是”の全体像を明らかにすることを試みたが、中国語モダリティ体系の一端を解明することにも貢献できるものだと考える。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　中田聡美　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	古川裕
	副 査	教授	杉村博文
	副 査	教授	由本陽子
	副 査	特任准教授	金昌吉
	副 査	特任准教授	張恒悦

論文審査の結果の要旨

『現代中国語における“是”構文の意味と機能』と題された本論文は、中国語の中で最も基本的な常用動詞である“是”を構文という枠組みのなかでとらえ、主にモダリティの角度からその本質に迫ることを目指した好論文である。

“是”は凡そ中国語を学ぶ者のすべてが最初に教わり学ぶ基本常用動詞である。このような“是”を巡る研究は、既に数多くの先行研究の蓄積があり、共時的な研究あるいは通時的な研究のいずれであるかを問わず、また文法理論研究あるいは教育への応用研究のいずれであるかを問わず、様々な問題意識に対応して様々な方法や理論によるアプローチがなされている、いわば古くて新しい問題である。

そのような研究史的文脈の中で見たとき“是”を巡る考察は必ずしも新規性をもった問題設定ではないが、本論文の独自性は構文とモダリティの角度から“是”を論じる姿勢を明らかにしている点にある。これはもっぱら統語論的な関心に偏ることの多かった従来の中国国内を中心とする研究方法の限界を越えて、陳述論からモダリティ研究につながる伝統と蓄積を豊富に持つ国語学・日本語学、そしてそれに学んだ日本の中国語研究を継承する意欲的な研究として位置づけられる。なお、この点において、第2章の先行研究概観において、もっぱら中国で発表されてきた主要研究に主として言及し、日本の学界で初めて“是”のムード特性に着目し、“是”の研究を大きく前進させた大河内1975を取り上げていないのは惜しまれる。

本論文は研究の中心部分をなす第3章から第7章にかけて、5種類の構文を考察の対象としてケーススタディを積み上げている。この内の3章で扱うケースはそれぞれ単篇の論文として既発表、あるいは発表予定の論考であり、著者の大学院在学中の研究成果が有機的に統合されていることが見て取れる。

第3章は、場所詞が主語となって文頭に立つことで一見すると存在文に見えるが、実は独自の話者の捉え方を表現している“場所詞＋是＋NP”構文を論じており、目的語NPの数量詞との共起関係について旧説を越える指摘を行っている。

第4章では動詞句に先行する“是”を論じ、従来の副詞説を採らず、この“是＋VP”タイプの構文に現れる“是”は現実モダリティの表出を担う助動詞（能願動詞）であるという新たな見解を主張している。このアイデアは確かに興味深いが、品詞論の定説を覆すだけの説得力を補強するためには今後更なる研究が求められる。

第5章では“是不是”が文中に現れるタイプと文末に現れるタイプを2種類の異なる構文と見なし、命題を指向する対事的モダリティと聞き手を指向する対人的モダリティの違いとする合理的

な解釈を行っている。

第6章では“不是……吗”をモーダル・フレームと見て、種々のモーダル副詞との共起関係や語用論的に派生する意味の関連性を論じている。特に、聞き手に取っての未知情報もこのフレーム枠に入りうるという指摘は新しい発見である。

第7章では二音節副詞に後接する“是”を考察している。一音節副詞に“是”が後接する場合は全体として二音節を構成するため語彙化が進んでいる例が多いが、二音節副詞に後接する場合には様相が異なる。特に従来の学説ではうまく説明のつかない言語事実を発掘し、“是”は接尾辞のような附属成分ではなく一定の意味機能を持っていることを主張している。

各章の考察は、十分な分量と適切な質を持った実例を素材として、実証的かつ慎重に分析が進められている。なかでも特筆すべきことは、中国語例文を既存の電子コーパスなどに頼って機械的に収集するのではなく、小説やドラマなど各種テクストから地道に実例を収集し、さらに全ての挙例に対して的確な日本語訳を与えていることは、著者の中国語の理解力の高さを表すものとしても評価できる。

議論の展開は概ね論理的に進められているが、音声面での実現形式（ストレスが置かれて重読されるか、軽く読まれて甚だしくは発音されないかなど）に関する観察がなされていない、曖昧な用語や記述が散見する、などの問題も残っている。また、本論文のまとめでも著者自身が述べているように、“是”の最も典型的な用法である“NP1＋是＋NP2”構文や、文法研究と教育現場の両面で大きな問題となる“是……的”構文については、著者の研究の更なる発展に期待したい課題である。
論文の記述は総じて明確な文章によって記されており、論文執筆スタイルや構成にも大きな瑕疵は見られない。

以上のことを総合的に判断し、論文審査担当者は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を得るのにふさわしい優れた研究論文であると判断した。